

# 柳田國男の戦時言説としての氏神合同論

由谷裕哉

## 一 問題の所在

本稿は、柳田國男（一八七五—一九六二）が、著書『日本の祭』（一九四二年）や『神道と民俗学』（一九四三年）で主張し始めた氏神に関する独自の捉え方を氏神合同論と仮称し、彼の戦時言説の一環として考察する。

柳田によれば氏神とは本来は氏の神であつたが、実際には異姓の家が共同して祀っていることが少なくない。この矛盾を説明するために彼は、氏神が合同または合併した、もしくは統一された、という歴史的経緯があつたと主張する。この経緯は帰納的な手順によらずに提起され、上記二書その他、占領期を含む一九四〇年代

のその他の著述や講演録（一九四七年の『氏神と氏子』辺りまで）において、しばしば見受けられるロジックとなつている。

筆者が柳田のこの議論に焦点を当てるのは、一つには戦時体制との関わり、つまり柳田の戦争協力の姿勢との関わりという観点からであり、いま一つは柳田のテキストを具体的な民俗事象との照応をほぼ気にせずに思想として読もうとする立場、いわゆる柳田研究がこのロジックを等閑視していることに対する不信感がある。

前者（柳田の戦争協力）についてこれまでリベラルな柳田研究者は、むしろ戦時下においても彼は時局に抵抗する視点を持つて著作活動が続けた、という趣旨の主張を行ってきた<sup>[1]</sup>。それに対して筆者は、柳田の戦争に協力的な言説をいくつか取り上げ、彼の神

祇祭祀論との関わりを考察したことがあった<sup>(2)</sup>。本稿は、そうした柳田の戦時協力の姿勢が、前稿の祭祀論とは少し視点を替え、彼の祭神論としての氏神合同論（以下、「仮称」を割愛する）とどう関係していたのかを、より具体的に問いたい。

後者（柳田研究における等閑視）については、管見の及ぶ限り、氏神合同に焦点を当てた柳田研究は見られない。そもそも、特定の柳田のテキストにおける氏神論もしくは神社論を専一に考察対象とした柳田研究そのものが、ほぼ存在しなかったと考えられる<sup>(3)</sup>。とはいえ、この氏神合同という問題がこれまで全く注目されてこなかった訳ではない。

というのも、民俗学プロパーの研究者ではないが、南島で宗教文化の調査を行ってきた住谷一彦が、『日本の意識』（岩波書店、一九八二年）でこの問題に触れていたからである。

住谷の議論によれば、柳田は敗戦直後の『先祖の話』（一九四六年）で祖霊信仰論を提起したが（上記書、二〇八頁）、それは「各人の家のレヴェルにとどまり」（二一〇頁）、日本社会でもつ普遍性に至っていなかったとする。柳田はその後の『氏神と氏子』（一九四七年）において、「民族統一の未来」（二二二頁）のため、「殆ど自然に成長したもの」（同頁）である氏神思想に注目し、それを三つ（村氏神・屋鋪氏神・一門氏神）に分類した。このうち、第一、二種の形態においては多くの異姓の家が共同して一つの氏

神を祀っており、そこをどう説明するかが「ここがロードス島だ、ここで跳べ」に相当する、と云う（二一四頁）。これについて柳田は「一門氏神」から「村氏神」および「屋鋪氏神」が成立する契機を七つあげ、それによつて「村氏神」＝祖霊祭祀の学説を「單純なたちで定式化」した（二一六頁）、とされる。

以上の住谷の立論には柳田の引用以外で「氏神合同」という表現は出て来ないが、柳田が全三〇パートからなる『氏神と氏子』の同題の巻頭論文で、住谷の云う「契機を七つあげて」（住谷著書、二二四頁）いるのがパート一六の「氏神の合同」なのである。<sup>(5)</sup>

本稿は、ここでの仮称である氏神合同論が、住谷が位置づけたように敗戦後の『先祖の話』で提唱された「祖霊信仰論」を踏まえ、柳田が（住谷の云うように）ロードス島で跳ぼうとして『氏神と氏子』において見出した議論ではなく、その数年前から戦時体制における時局との応答の結果として彼が導いたのではないか、という解釈を提起し、その妥当性を問う。

本稿で行う手法は、柳田の個々のテキストをその文脈において読解することを起点とする。これは、柳田の言説を（いわゆる柳田研究のように）現実との対応が問題とされない思想として読解するのではなく、彼の個々のテキストが日本における宗教文化と対応しており、その考察にとつて何らかの意義を持つという期待に基づいている。それを踏まえ、本稿では以下、彼の戦時体制への対

応に伴う氏神観の経年的な変化を追跡してゆきたい。

## 二 一九三〇年代における柳田國男の氏神イコール祖霊説とその問い直し

本節では、次節で柳田の戦時言説として本稿で云う氏神合同論を検討する前史として、一九三〇年代における彼の氏神観、とくに氏神の実態を祖霊と見る捉え方（仮称として、氏神イコール祖霊説）が登場してきたことの周辺を扱う。

### （1）氏神イコール祖霊説の始まり

上記のように管見の及ぶ限り、柳田のとくに戦前の著述物で論じられた氏神もしくは神社で祀られる神の実態を専一に扱った先行研究が無い<sup>⑥</sup>ため、ここで云う氏神イコール祖霊説の始まりについて研究は乏しい<sup>⑦</sup>。

しかし、柳田國男の祖霊概念に関して一九七四年（昭和四九）に小川直之が、『定本柳田國男集』の中から祖霊および類似する語（祖神・御霊など）を抽出していた<sup>⑧</sup>。そのうち初期に当たる柳田の著書・論文は、発表順に「丹波市記」、「年棚を中心として」、「葬制の沿革について」、「昔話新釈」、「明治大正史世相編」、「厄介及び居候」、「地梨と精霊」、そして「食物と心臓」とされていた。小

川のこの分析を是とすれば、以上の八論のうち、明確に神社ないし氏神と祖霊との関わりが問題とされる柳田の論の始まりは、一九三二年（昭和七）の「食物と心臓」<sup>⑨</sup>となる。

同論は、郷土研究のあり方として一国民俗学を提唱し、従前の「飴で子供を釣る嫌ひが無いでも無かつた」郷土教育を批判してゆく。その代案として、同種の民俗資料を各地において比較することが重要であり、とくに民俗資料分類のうち口碑や伝説などは既に多く集められており、将来は道徳や信仰に進みたいとする。

ここまでが全八パートのうち四までで、五でようやく「食物と心臓」なる標題が提示され、その例として餅に関わる俚語歌謡<sup>⑩</sup>では不足で、村々の社の由緒と季節の祭に重きを置きたい、などとする。以上の議論を踏まえて、六で次の引用のように氏神（神社）イコール祖霊説が展開される。

日本人の家を大切に思ふ永い間の習性、それと因縁の存するらしい農国本の格言は、一たび産土神氏神の今ある信仰を省察して見れば、少なくとも其片端は之を理解できると思ふ。神社はその上下大小を通じて、曾ては祖霊の信仰と不可分な時代があつた。後々推移を経て他処の大神を迎へ祀るやうになつても、尚その主神と住民との中間に、後者の先祖の神を介在せしめて居る例は至つて多い。祖霊の干与せざる一郷の

禍福といふものは無かつたらしいのである。<sup>10)</sup>

この引用に続いて、中世に引導という風習が始まったことにより盆と正月の機能が分かれ、神社もこの二つから離れたとされる。以下に続く餅に関わる考察は、この正月および盆（生御玉）との関わりで引き合いに出されている。

以上のように「食物と心臓」においては、餅と正月および盆の習俗との関連付けが傍証のように立論されているとはいえ、本稿が関心を寄せる神社ないし氏神と祖霊との関係は、帰納的な手順を全く踏まずに唐突に同じものだと断言されていることが分かる。

## （2）一九三〇年代半ば——通称・山村調査における氏神

このように「食物と心臓」で初めて提唱されたと考えられる氏神イコール祖霊説は、その二年後に当たる一九三四年（昭和九）から三年度行われた通称・山村調査によって検証が試みられた、というのが筆者の見立てである。筆者は、旧稿においてこの山村調査を、そうした理論検証型の調査だったと解釈したことがある。<sup>11)</sup>

この山村調査とは、柳田が主宰する郷土生活研究所が日本学術振興会より三年間の助成を受けて執行した調査のことで、正式名称は「日本僻陬諸村における郷党生活の資料蒐集調査」であり、調査者は主に柳田の門下生たちであった。以下、筆者の旧稿を踏

まえ、柳田の一九三〇年代半ばにおける氏神観という観点から概要する。

当該調査は、各県一箇村以上を目安に延べ五二村を調査対象村とした。年度によって微妙に変化があつたものの、単年度においては同一の一〇〇項目からなる調査票に基づいた調査であつた。その索引項目および質問文例<sup>12)</sup>を見る限り、詳細は割愛するが、氏神関連の項目（氏子や同族神、祭祀組織としての宮座などを含む）が一〇〇項目中一〇項目以上あり、比較的多いと思える。

それでは、以上の質問項目について調査報告書はどうだったのか。初年度と第二年度については調査者が小論考を纏めるスタイルであり、<sup>13)</sup>それらについて検討した筆者の旧稿の通り、氏神あるいは神社に関して踏み込んだ考察はなされなかった。

三年度におよぶ調査全体の最終報告書として一九三七年（昭和一二）に出された『山村生活の研究』<sup>14)</sup>は、一〇〇項目を統合した計六五項目についての一種のデータ集的なもので、個々の報告は短い。その六五項目のうち、氏神関連の質問項目に対応するのは、四三先祖祭、四四同族神、四五屋敷神（以上、杉浦健一）、四七氏神と禁忌、四九祭前の慎み、五〇神社・神田の管理、五一神事の座席、五二氏神参りの帰村（以上、大藤時彦）、五三山の神（倉田一郎）、五四神仏に祀られたもの（櫻田勝徳）、などであつた。

これらのうち、杉浦健一の言説は非本質主義・非進化主義に貫

かれており、神性や村祭について遡及的に何らかの古型を提示するようなものではなかった。<sup>15)</sup> 対して大藤時彦は、五二「氏神参りの帰村」の冒頭で、「所謂血族神としての氏神が産土神としての鎮守神に移行した結果」（同書、四一二頁）のような予断から出発するように、帰納的な立論を行おうとしていない。大藤は五一「神事の座席」でも、「地域的と血族的の宮座とはどちらが本源的か或は両者は全然二つのものか」（四二一頁）と先験的な問いを立てるものの、調査結果からその答えを導き出せていない。

つまり、山村調査の質問項目においてそこそこの割合を占めていた氏神（含・同族神、宮座など）に関して、柳田がおそらく期待したように祖霊あるいは家や同族と関連づける成果はあがらなかった、と考えられる。柳田が最終報告書『山村生活の研究』に付した「山立と山臥」の冒頭に「我々の失望の記録を留めて置かう」（同書、五三八頁）と記した理由の一端は、このことに起因しているのではないだろうか。

### （3）一九三〇年代半ば以降——原田敏明らの登場

ところが、上記「山村調査」が進行中だった一九三〇年代半ばに、柳田グループの民俗学以外にも日本の村落の調査に着手し始めた。既に筆者は、この時代における肥後和男グループの近江での宮座調査や、シカゴ大学のエンブリー夫妻による熊本県での集中

的な村落調査、井上頼寿による京都周辺の宮座調査、小田内通敏を指導者とした県範囲の総合郷土研究などについて概要していた。<sup>16)</sup>

それらの研究と並んで、氏神の位置づけという点で柳田國男および門下生たちによる山村調査と対立する見解を提起したのが、宗教学者の原田敏明であった。原田は、一九三六年（昭和一一）から宇野圓空グループ（他に古野清人）の一員として『本邦農耕儀礼の宗教民族学的研究』なるテーマで有栖川宮記念奨学金を得て、村落の調査を始めていた。<sup>17)</sup>

この共同研究における原田の成果は、「信濃更級郡武水別八幡の農業神事」（『民族学研究』第三巻四号、一九三七年）、「氏神祭祀の組織について」（『日本諸学振興委員会研究報告』八哲学、一九四〇年）、「当屋に於ける氏神奉齋」（『帝国学士院紀事』第一巻一号、一九四二年）、という三論文であった。

筆者はこれら三者のうち、三番目の「当屋に於ける氏神奉齋」が柳田の『神道と民俗学』（明正堂書店、一九四三年）他の頭屋制論に影響を与えた可能性について、先に詳しく検討していた。<sup>18)</sup> たしかに原田の上記論文は、「氏神奉齋」と題しながらも氏神祭祀のあり方だけでなく祭祀組織を緻密に検討する内容であり、柳田はそれを受けて自己の頭屋制論を形作ろうとしていたと考えられる。

それを遡る上記二番目の「氏神祭祀の組織について」は、比較的短い論考であるが、「組織」を題名に含みつつも、とくに前半は

氏神がどういう存在かを問うていた。すなわち、氏神が「地域的な性格」をもつて現れるとし、血族集団ではなく「土地に即した」ものであるとする。

一体我が国では古くから農業を営み、農業に依つて生活をして居つたと云ふことが其の特性を形造つて居ると云ふべきであります。是は上代の氏族とか或は一族とか、さう云ふ集団に於ても血族関係であると云ふ以上に又以外に地域的に集団を結合せしむるものであつたと云ふことが出来るやうに思ひます。随てさう云ふ集団の奉ずる所の氏神も、其の集団が血族的である与否とに拘らず地域的な性格を以て現はれて来るのであります。即ち氏神は土地に即したものでありまして、此の点に其の他の神々、神祇との差異もある訳であります。<sup>(19)</sup>

このことを踏まえ、「今日の氏神の祭祀は一定の地域集団の人々が其の生活様式から来る所の農業に係した祭を行つて居る<sup>(20)</sup>」と祭祀論へ進み、そうした祭祀を行う特殊集団を宮座と呼ぶとする。宮座は近畿から西で使われる言葉だとされ、その例として近畿地方などでの一年神主の例が紹介される。そして専門の神職が神事に関わるようになり、村の神社は氏神のな性格を次第に失つてき

た、と結論づけている。

筆者は、本稿で主眼とする柳田の氏神合同論が、原田によるこうした氏神の捉え方の代案として提起された側面もあるのではないかと考えるのである。

### 三 一九四〇年代前半における柳田の氏神合同論

以上のように、山村調査に関する「失望」と原田敏明による新たな氏神論の登場を受けながらも、一九三〇年代後半から一九四〇年頃までの柳田は、いずれも以前から関心を寄せていた昔話を含むナラティブや方言の研究に傾注していたような印象がある。

とはいえ一九三〇年代後半には、一九三五年（昭和一〇）に始まる民間伝承の会（柳田の還暦を記念して日本青年館を会場に開催された日本民俗学講習会を契機として組織された研究団体<sup>(21)</sup>）の機関誌『民間伝承』に、戦局に積極的に協力してゆこうとする論調が見られるようになる。その代表的な言説として、先行研究において戸塚ひろみ<sup>(24)</sup>、福田アジオ<sup>(25)</sup>、川村邦光<sup>(26)</sup>の三者が揃って取り上げている、一九三九年（昭和一四）三月刊の同誌第四巻六号の冒頭頁に掲載された倉田一郎「時局下の民俗学」を見ておこう。曰く、「昨日まで民俗学の将来を愉しさに語らつた青年」が「この激動期の時局

「下」に民俗を研究しておられない、と言った由を冒頭に、「現在学としての民俗学の現代に於ける使命」を提起しようとする内容である。具体的に、「曾てのナチス独逸の植民政策に偉大なる知識として応用せられた独逸民俗学の光輝ある歴史」を回想することなどをあげている。

先行研究の三者とも「ナチス独逸」の語を含む先の引用符内を否定的な意味合いで引用していたように、この倉田の巻頭言には、ナチスに貢献した「独逸民俗学」に倣って積極的に戦局に貢献しようとする姿勢が表出している。それに比べて、柳田本人が戦争に関わる言説を公にするのは、もう少し後の一九四二年（昭和一九七）になつてからではないかと筆者は考えている。

（1）柳田國男の戦争協力に関わる言説の登場（一九四二年）

「新たな目標」…この点に関して先行研究においても注目されることがあるのは、『民間伝承』誌の体裁が第七巻までのタブロイド判からA5判に変わった第八巻の第一号（一九四二年五月）から始まった「巻頭言」に、柳田が執筆した「新たな目標」である。この巻頭言は、同年六月刊の第二号、七月刊の第三号にも同題同文で繰り返された。冒頭から中ほどまでは、以下のようなであった。

今までこの雑誌が力を傾けて居たのは、主として地方文化

の消え去るものゝ保存、及び之を集録せんとする人々の相互援助であつた。ところが我々少数者の協同では、思ふやうに資料が集めに、く、是非とも外部の理解者を得なければならぬのと、一方には又時運が大いに改まらうとして、衣食生産の日常生活から、信仰芸術社交法等、あらゆる問題の未来を考究する必要が起り、それには一般民衆の前代生活に就てもつと盛んに民間伝承の知識を利用しなければならぬといふことを、認める人が多くなつて来た。この二つの刺戟から、今度いよいよこの雑誌の編輯ぶりを更へて、改めて世の中にまみえることになつたのである。<sup>(28)</sup>

「時運が大いに改まらう」と柳田が書いたことについて福田アジオは、「一九四二年であるから、その内容を推察するのは容易であろう」としたうえで、「積極的に時の体制に迎合しようとしているのではない」が、「このような表明の積み重ねが結果として戦争協力」<sup>(29)</sup>なつたとしている。確かにこれらの文言は、三年余り前の倉田一郎「時局下の民俗学」ほど直接的な表現ではないにせよ、民間伝承の調査研究が時局において求められてきたことを歓迎する姿勢を読み取ることが可能ではないだろうか。

「日本の母性」…一九四二年一二月の『週刊朝日』第四二巻二五号に掲載された。「この空前の大戦役に奉仕することによつて、始

めて国民の自覚し得たる尊といふものが幾つもある」と始まる、戦争協力の姿勢を明らかに示す記事である。内容は、いわゆる軍国の母を称讃することを意図していると考えられる。

先行研究において柘植信一は、一九四三年頃の市川房枝らによる戦争協力の一環として母性の意義を見出すといった、「積極的な戦争協力」を女性に要請する「無内容な言葉」の氾濫と比較して、柳田は「戦争によつて、これまで埋もれていた母の道が体験されるようになった」ことを描いている、と肯定的に解釈している<sup>31)</sup>。しかし、柳田は以下の引用のように、「軍国の母」の意義を立派な軍人を育てるところに見出していると考えられるので、柘植によるこの評価は当たらないであろう。

多くの軍国の母の言葉行ひを見て行くと、自ら前線に出て働くことは出来ないで、常に男性を透してその国家に対する志を行はうとした人々の、日ごろの心構へと思ひ遣りの中には、むしろ我々の経験を超えた、悲壮なものゝあつたことがわかるのである。<sup>32)</sup>

国恩といふやうな言葉は一生涯口にもせず、またその必要もしばしば起こらなかつたけれども、これが人間最高の義理であつて、一朝危急の国に迫るものがあれば、命に換へても

その義理を立て貫くのが男だといふことを、いつの間か彼等は教へられ、また心の底に銘記してゐたのである。<sup>33)</sup>

後者の引用は、教えたのが母、という文脈における一文である。以上二点、一九四二年における柳田の時局あるいは戦時体制に関わるテキストを参照した。「新たな目標」以前に類似内容の議論が無いと断言はできないが、上記二点はいずれも先行研究が注目していたものであるので、一九四二年を柳田の大戦との関わりにおいて分岐点になった時期と捉えておきたい。そして、本稿で問題とする氏神合同論は、筆者が現在確認できている限りではあるが、この年から主張されるようになった。

そこで以下に、柳田による信仰・神社研究においてこの年から敗戦までを代表する著作である『日本の祭』（一九四二年）と『神道と民俗学』（一九四三年）の二著作、柳田が戦時体制に積極的に貢献しようとする志向が顕著に表出している一九四三年七月の長野県東筑摩郡での講演録、およびそれら以外の論考について、時代順に各々における氏神合同論を概観する。

## （２）『日本の祭』（一九四二年十二月）

弘文堂書房より一九四二年一月に刊行された。同書が東京帝大の学生に対して前年（一九四一）秋に行つた連続講演の記録で

あつたことは、冒頭の「学生生活と祭」に示されている。全体が七の題目に分かれたるうち、最後の二つである「供物と神主」「参詣と参拝」は予定されていたものの講演されなかつたことが、「自序」に出る。したがって、講演から刊行年の一九四二年末までの間に新たに書き足されたと考えられる。

講演されたうち、「祭から祭礼へ」「祭場の標示」「物忌と精進」「神幸と神態」では、柳田自身が「祭礼」と呼ぶような、氏子以外の参列者がある比較的大きな祭りを念頭において議論が進められていると思われる。したがって、氏神（神社で祭られる神、祭神）の実態を問う議論は見られない。

対して、講演されなかつた二題目のうち最終「参詣と参拝」に、本稿で云う氏神合同論が提唱されている。この「参詣と参拝」は全一二パートからなり、『日本の祭』でも長めの論となつている。最初にお賽銭、オヒネリについて語られ、第四パート以降、生まれた土地の神と旅して訪れる地の神社という、内外の違いに移る。六では後者の参詣する神に対して、旅人が行うのが祈願だとされる。七では参詣が臨時の祭であるとすれば、その始まりを見ようという立論で、村民の一人が危篤に陥つた際の祈願の例があげられる。その中で、次の引用のように「御社の合同」が人口増との関わりで説明される。

氏神が本来群の爲の神様であつたことは言ふまでも無い。然るに時あつての個人の祈願、それも公共の支持し居るものだけで無く、單なる私の望みまでも聴き届けたまふものゝ如く、信じられるに至つたのは理由が無くてはならぬ。其一つには村の御社の合同、即ち幾つかの氏族が共々に、一つの神を氏神として齋くことになつたからで、人が多くなり生活が複雑になれば、たとへ利害はさう容易に抵触せぬまでも、個々の信心の深さ正しさの差によつて、神の恩寵もおのづから厚薄が有るやうに、考へ始めることは免れない。<sup>34</sup>

八では「外の祭」に話が戻り、本地垂迹説なども新しい拝む神を承認しようとする態度の一つだとする。九・一〇では神を認める方法としてヌサが触れられ、一一ではヌサが官知の神社に増進されるのが官祭であつたとされ、村々の小さな氏神社でも公祭と名づける祭があつたことを導き、次の引用のように続く。

ところが世の中の進みにつれて、色々の変遷が此方面には起つた。一ばん大きなものは氏神の統一、幾つもの異なつた氏族が合同して一つの御社を祭らうとする申し合せで、是には有力なる一つの氏に従属してしまふものと、大よそ対等なる協力とがあつて、後者の場合には祭主役の輪番制、いはゆ

るマハリトウ（廻り頭）・一年神主など、いふものゝ規約が設けられた<sup>(35)</sup>。

見られるように、引用の後半では祭主の輪番制が、「氏神の統一」と対応する祭祀組織上の段階とされている。議論は、この輪番制が頭人の不馴れにより、今日の神職制の前提となったことに進む。

一二は「民俗学の範囲外」として一種の補足がなされる。神祭の方式が離れた地域で一致しているとされ、「神が祖霊の力の融合であつたといふことは、私はほゞ疑つておらぬ」ことも述べられる。「世界に比類無き神国のマツリゴト」<sup>(36)</sup>について、国民の精神文化が統一されている、などともされる。

以上のように、「参詣と参拝」はかなり雑多な内容が含まれている。その中で、七で提起される「御社の合同」は人口増に伴った現象であるとされ、一一での「氏神の統一」は、祭主の輪番と対応する歴史的段階における氏神のあり方を示す概念として提起されている。一二の末尾では戦時体制への協力の姿勢が表明されていると考えられるが、先に見てきた氏神合同論と「国民の精神文化」の「統一」とが密接に関連づけられているかどうかは、かなり微妙であろう。

### (3) 『神道と民俗学』（一九四三年四月）

神社精神文化研究所での一九四一年七月の講演を、やや時間を経て一九四三年（昭和一八）四月に刊行した書で、講演の「筆記に手を入れた」、と柳田は書いている。「今度の大戦役は稀有の機会」（新しい『柳田國男全集』第一四巻の五八頁、以下引用には同巻の頁数を示す）のように連合国への開戦後と思われる文言が含まれているため、実際には「手を入れた」部分が少なくないと推察される。

『神道と民俗学』について筆者は、これまで複数回考察を重ねてきた。その初回に、全四二パートを次のように分類していた。一―一三が民俗学と神道史との協力の可能性、以下、その民俗学側からの三例として、一四―一八で御旅所、一九―二五が頭屋制、二六―二九で二所祭場論と神送りが述べられる。三〇―四二でやや話題が変わり、氏神祖霊論および神社合祀との関わりとなる。

この最後の部分をさらに分類すると、三〇は公共の祭と個人による祈願との違い、三一―三四は「今私などの注意している問題」が二つあるとし、その一つを末社・境内社の多いこととする。三五―三六は、前の第一の問題の続きに加え、第二の問題として神の分霊をあげる。三七―四〇が「氏神合同」など、一部で霊神の問題にも触れ、四一―四二が王子権現と若宮、イハヒ神の問題などが触れられる<sup>(37)</sup>。

以上のうち頭屋制への言及のはじめ、一九の箇所次のように

ある。

但しこの現在の頭屋輪番制の始まったことだけは、全く新しい社会的事情からといふことが出来ます。第一には氏神様の併合合祀です。是は村といふ公共団体の生活意識、即ち祭にも他の色々の事業と同じやうに、出来るだけ衆力を聚めて効果を大きくしようといふ願ひに基づいて、祭主の任に当り得る者の数を多くしたのであります（四〇頁）。

このように、「氏神様の併合合祀」を「頭屋輪番制」の始まりと対応するものとしており、その背景に祭の効果を大きくしようとする願ひを求めている。

上記で「氏神合同」に関する纏めた三七―四〇では、三七では次のような表現で、明治末の神社合祀を通歴的に行われた神社の合同の一齣と位置づける。

今まで私は氏神様といふたゞ一柱の、名の無いもしくは名を称へることを許されぬ神を想定して来ましたが、この一柱といふことは実は考へ方でありまして、元に遡りますと我々の氏神は、夙くから一つの大きな合同体でありました。日本の神社合祀は、官府の懇懇を待つことなしに、以前にもくり

返し行はれて居たのであります。古記の表に依りますと、氏神は紛れも無く氏の神、たゞ氏人のみの集まつて祭を仕える神でありました。ところが現在は三つ五つの異氏族の者が、共に一社の氏神の、氏子となつて居るのであります（七一頁）。

さらに、一氏一神の場合と集合した氏神とを具体的に比較する。「合併の行はれなければならかつた理由」を、「我神を大きく力強く莊嚴にする」という「氏子たちの最も強い希望」だともしている（以上、七二頁）。

三八では、「氏神合同の最も大いなる結果」を、「異姓の人が神を祭ること」（七二頁）が始まつたこととし、頭屋が輪番になつたことと対応すると位置づける。これは、先の一九と同じである。後半は、靈魂や死生観の話題に移り、死ねば祭られるのは「大東亜圏内の諸民族」に共通の死生観であつたとする（七三頁）。

三九では「村の結合の為に大きな推進となつて居た氏神合同」（七四頁）ではあつたが、靈魂の納まり処が無くなつた場合に、全国的な大神を村に勧請したことが述べられ、後半で靈神の話、盆や正月に来る靈魂のうち、無縁仏・外精霊になるものが論じられる。

四〇では盆と正月などに一門親族が集まる場合に、本家に特別

の神の祭場があつて、一門の者が参列する神祭が古いとし、「氏神の合同といふことが断行せられて後に、更に其氏子の中から、一族だけの小さい結合を保たうとした趣意」(七六頁)であつたと思つづける。合同しながら、なお氏神の名を保留する例をあげ、対して鎮守は新しい語で「我々の氏神の具へて居たもの」を持つていないとする(七七頁)。それを踏まえて、戦時体制との関わりを次のように述べる。

国の共同の大敵を克服するといふに先だつて、何よりも有難いことは一国の秩序に服し、各自の区処に就き、皇家の安泰の為に働かうとした点であります。具体的にいふと神御自身の御分限をお認めなされ、より大いなる神々の御威徳に拠つて、更に万民をもつと高い幸福へ進ませようとせられる点であります。神となつて後もなお朝廷に忠誠であつたことであります(同上)。

要するに、合同した氏神が伊勢神宮の下位にあることが、万民が「皇家」「朝廷」に忠義を尽くすことと照応しているという意味ではないだろうか。この後、近年の神社合祀がこうした氏神の合同の一環であつたという趣旨の議論が繰り返される。

以上のように、『神道と民俗学』の四〇では、戦時体制と氏神の

合同とが密接に結びつけて定位されている。また、氏神合同の背景としては、三七では大きく荘厳な氏神が氏子たちの希望であつたこと、三九では村の結合のためであつた、などが提示されている。

#### (4) 長野県東筑摩郡での氏神調査に関わる講演

(一九四三年七月)

柳田が戦時体制に貢献せんとする姿勢が『日本の祭』『神道と民俗学』以上に明瞭に表れている言説として、一九四三年(昭和一八)七月九日に長野県東筑摩郡教育部会主催により松本市で行われた、彼の氏神調査に関わる講演をあげることができる。同講演では氏神合同論も触れられた。

柳田と同教育部会との関係であるが、柳田が一九一七年(大正六)に『東筑摩郡誌別篇』の編纂事業を指導・助言したことに始まる。<sup>(40)</sup> 柳田は、一九四三年五月に上梓された『東筑摩郡誌』別篇第二「農村信仰誌―庚申念仏篇―」の序文も執筆していた。<sup>(41)</sup>

この講演も、『東筑摩郡誌別篇』の第三「氏神篇」として企画された郡誌のために、地元の教員に調査のあり方を指導する趣意の講演であつた。柳田自身が講演手控えの三分の一ほどを元に、一九四四年一月刊の『民間伝承』第一〇巻一号(氏神特集号)に「氏神様と教育者」と題して発表しており、『定本柳田國男集』第

二九卷（筑摩書房、一九七四年）にも再録された。

しかし、ここで問題にしたいのは、新しい『柳田國男全集』第三一巻に掲載された「氏神篇調査に関する柳田國男先生講演の概要」なる講演録である。これは、信濃教育会の東筑摩郡教育委員会によって謄写版にされたものを底本としているとのことである。謄写版には日付けが記載されていない由だが、上記全集の「解題」では同年九月一八日までに完成したとしている<sup>(4)</sup>。

この「概要」は五つの項目に分かたれている。そのうち氏神合同論に関わる記述があるのは第二および三パートのみだが、柳田の戦争協力に関わる姿勢は他箇所にも見られるので、順に見てゆく。

第一の「農村氏神信仰の状態はどうなつてゐるか」では、大東亜戦争下で信仰が戦争に不可欠のものであるとし、こうした現状で氏神信仰をどう昂揚すべきか、と問いかける。神社に対する「敬神」と異なる「祈願」がある。兵士の大部分を供給する農村で神様に対する信仰は目覚めており、この信仰が生きている限り、「日本には軍神に続いていくらでも喜んで死んで行く人が出て来る」（同巻、九九頁）、とする。

第二の「氏神氏子の概念はどうなつてゐるか」では、敬神政策のために信仰は衰えているのではないかとし、その対象たる氏神に対する信仰を調べて欲しい、とする。神の概念が多様であるの

に對し（山の神、川の神、など）、氏神様は限定された概念であるが、それが推移しているかどうか。

さらに、「元の氏子の概念は、氏神の子という意味」であり、「氏神としてまつられる神は原則として祖神である」とする。春日神社が藤原氏の祖神であるのに対し、「祖神ならざる他の神を祀る氏」もあり、さらに氏神を「数氏合同して祀る場合がある」とされる。それに比べて南信地方での「一族一まきだけで」祀る祝殿が触れられ、氏神の在来の呼び方を調べて欲しいと続けている（以上、一〇一頁）。

元の意味が氏神の子であつた氏子概念も変化しており、また氏神と鎮守とは異なる（鎮守とは土地を守り、外敵を防衛する意味の外語で、氏神は祖神）、氏子以外の祈願は個人的な祈願となること、氏子入り、氏子帳についてなどが触れられる。

続いて「調査についての注意」として、氏子に関連する「頭屋制度は残つてゐるか」が第三となる。「勿論所謂神主はいらなかつたのであるが」、「其の土地の代表者が代々の神主となつた」。その神主には精進潔斎が必要であつたが、頭屋になる家が決まつていた時代にはそれを行つていた。しかし、「併合するやうになつてからは軒まはり又は帳面廻りでやつて行くといふ様になつた」（以上、一〇四頁）と、氏神の「併合」に伴つて頭屋が輪番になつたと位置づけている。この議論は、『日本の祭』『参詣と参拝』の一一や

『神道と民俗学』の一九や三八と共通する。

また、井上頼寿や肥後和男の本が言及され、「常頭屋」が神主の起こりとされる。今日でも「頭屋制度の残つてゐる所はめつくり神信心が強い」（一〇五頁）、「人心を帰一する力をうむものはこの頭屋制度の復活であると思ふ」（一〇六頁）、などとする。両者とも、典型的な戦時言説であろう。

さらに、第四「祭と女性の任務」では、会場に不在だった女性を念頭に、女の氏子の果たした役割を述べる。第五「座談会の概要」では、神社の縁起や来歴は本調査において価値が低いこと、祝殿の資料を付録にしてほしい、また靖国神社について、「どうして汚れた死人から神様にうつるか。その解決の方法は靖国神社の様な特別な社をつくることである。靖国神社は汚れてゐてよい。別格といふのはさうしたことではなからうか」（一一〇頁）と、同社の役割を積極的に評価している。さらに、「調査の内容は戦争とむすびつけて考へてもいいと思ふ」（一一一頁）ともしている。

以上のようにこの講演概要では、おそらく柳田が地元で作成された謄写版を修正していないせいなのか、戦争に積極的に貢献しようとする文言が散見する。第一パートでの軍神云々、第三パートでの頭屋制度にまつわる神信心、人心を帰一、第五パートでの靖国神社への言及や調査と戦争との関連付け、等等。

因みに近年の柳田研究に、第一パート軍神云々の箇所について、

「戦時下の軍神信仰とは異なる新たな生き方を示すこと」を柳田が含意していたと解釈するものがあるが、あまりにも元のテキストの文脈を逸脱した読みであろう。

そうではなく、この講演は聴講者であつた地元の教員に対して、戦争協力のために軍神に続いて死地に赴くべき農民兵の信仰対象としての氏神調査を求めていた、と字義通り理解すべきであろう。氏神のあり方を調査することが、戦時体制に積極的に貢献する行為として意義づけられていたのである。

とはいえ、この講演録において氏神合同がどう扱われていたかに関しては、上記のように第二パート（祖神以外の神を数氏合同で祀る場合）と第三パート（頭屋が輪番制となることと氏神の併合とが対応）の言及に限定され、分量的にさほど多くなかった。

それに比べて、柳田が後に自らの講演手控えの三分の一ほどを元に、一九四四年一月刊の『民間伝承』第一〇巻一号に発表した「氏神様と教育者」では、もう少し明確にこのテーマが言及されている。この稿と先の謄写版記録との対応は良く分らないが、同稿では全五パートの最終五に次のように述べられている。謄写版のものでは、先に触れた第二「氏神氏子の概念はどうなつてゐるか」に対応するのだろうか。引用は、同じく『柳田國男全集』第三一巻の一三三頁より。

氏神の最初は明かに一氏一神であつた。原則としては始祖高祖を神として祭つたやうだが、次々には他の神を祭つた氏神も出来て居る。多分はその家の祖神の在世の日に既に祭つて居た神を祭ることが、祖神を祭るのと同じと解せられた結果であらう。ところが村といふものの進化に伴なうて、異なる数氏の氏人がその氏神を合同し、或は最も力強い一つの氏族の神を他の幾つかの異姓が共に祭るといふことになる、先祖を祭つたものよりも此方が認められやすかつた。それが村々の現在の氏神社が、中世以前に氏神と謂つて居たものと、全く別ものゝやうになつて来た原因ではないかと私は思つて居る。

見られるように、ここでは「氏神を合同」する背景として、『日本の祭』『参詣と参拝』の第七パートと同じような人口増（「村といふものの進化」）に加えて、氏族の神の中で最も強力な神を祭るようになったことをあげている。この議論は、謄写版を底本とした講演概要には見られない。

逆に、こちらの柳田執筆による概要では戦争協力の姿勢が、「信仰が戦争には欠くべからざる」（二三〇頁）のようなフレーズを除いてさほど表に出ていないのも、先の地元で作られた講演概要と比較して興味深い。柳田が『民間伝承』誌の読者向けに、実際に

東筑摩郡の教員向けに話した戦時体制に奉仕せんとするための調査、という趣旨の文言の多くを割愛したのだと考えられよう。

#### （5）その他の敗戦までの氏神合同論

以上の他にも、長野県での講演が行われた一九四三年七月以降、柳田は似たような氏神合同論を敗戦までに複数回行っている。管見の及ぶものについて、以下に概要したい。

「おしら神と執り物」…後に『山宮考』（小山書店、一九四七年）に収録されたのが初出で、その時の末尾、初出形態の一八四頁に「昭和十五年一〇月」と記載されていた（『定本』以降も同<sup>44</sup>）。しかし近年、赤坂憲雄が一九四三年七月に脱稿したと推定し、新しい『柳田國男全集』第一六卷（一九九九年）の解題五三四―五三五頁でもそれを踏襲しているので（執筆者は宮田登）、ここでは仮にその年代比定を是として概要を行う。

同論は祭神論というより、オシラサマの祭祀形態からそれがどういった神なのか、またイタコの関与は本質的か、を問うたものと考えられる。前半はやや込み入った議論となつてゐるが、全一七パートのうち一二でオシラサマの祭祀形態を三通り示し、そのどのパターンが古いか考察する。最終一七パートで、そのうち最も古いのはオシラサマを家の神として祀る形態であるとする。

この祭祀形態を巡る議論の中で、パート一四で家の神の変遷を

問う文脈で次のような議論がある。

ひとへにオシラサマに御知らせを願ふやうになつたのも、新たな信仰と言はうよりも、寧ろ大きな信仰の砕け散つて、斯うなつたと見るのが当たつて居るかと思ふ。是には勿論外からの原因も大きかつた。多くの家々が協同して崇め信ずべき大神の出現は、民族結合の必然の要求であり、更に又氏の中心の力が小さくなつて、一つの氏神があまたの家々を均しく護りたまふといふ考えが行渡り、自然に各自の家の神を小さく見るやうになつたのも事実だが、それよりも今まで気が付かずに居たのは、拝むべき神の御名の無いことであつた（同巻、一九八一―一九九頁）。

氏神の合同という表現ではなく、また文章もかなり晦渋であるが、ここでいう氏神合同を、家の神を小さく見るようになることと相對する現象、という観点から捉えていると考えられる。「民族結合の必然」を戦時言説と考えることができると思へば、それと氏神合同論とが結びつけられていると解釈できるであらう。

『ウブスナのこと』…上記の翌月、一九四三年八月刊の『民間伝承』第九巻四号、「月曜通信」という柳田による一種のコラムの第一回である。「ウブスナ神と氏神と、二つは同じものか、はた又

別々の神様か」を問題として提起し、「鎮守さまと氏神及びウブスナとの差」が次第に分かつてきたとする（同号、二四頁）。つまり、氏神合同という語そのものは出ないものの、氏神とそれを包摂する地域的な祭神との違いを柳田がどう把握していたのか、という論となっている。以下の引用は、氏神と鎮守および産土との関係についての箇所である。

仮にもし私などの生れ在所のやうに一つくの村には氏神、その村々が合同して祭をする一郷の社が鎮守であつて、特に或一つの有力な氏神を指定して、総体の鎮守と崇めるのが通例だつたときまると、之に基づいてなほ色々の事が考へられるやうになる。（中略）元は氏神であつたけれども、是からはウブスナと謂つてもよいといふ時代が、或時新たに現はれたのではないかと考へられる。氏神が現在必ずしも氏の神では無いこと、又氏の神ばかりを氏神といふ地方が、今でも意外に弘いを見ると、この想像も全く無分別なものとは言へない（同号、二七頁）。

この文脈ではかなり分かりづらいものの、ウブスナ（産土）を氏神が合同した形態だと位置づけているのではないかと推察される<sup>⑤</sup>。なお、戦時体制との対応はとくに見られない。

「敬神と祈願」…初出は一九四七年刊の『氏神と氏子』（小山書店）であるが、同書冒頭の「解説」に一九四四年（昭和一九）一月十五日、神祇院での講演における「談話の手控え」とある。筆者は既に同論に関して小稿を著しているが、<sup>(46)</sup>そこでも述べたように全一六パートのうち、一二「自然と人為」の冒頭箇所および一五「悲しむべき経験」後半箇所<sup>(47)</sup>に、占領軍による検閲による改竄が見られることに加え、タイトルの「祈願」以外に「信心」「神信心」「信仰」なる語が併用されており、各語の意味する内容の差異が分かりづらいこともあり、理解が難しい講演である。とはいえ、大半の部分でタイトル通り氏子・氏人に限定されずに神社を信仰する側からの考察が展開される。

そのような論旨の中で、氏神合同なる語そのものは登場しないが、その経緯を解説したのが六の「内外信仰の接合」であろう。

神も仏法の諸天善神と同じく、日ましに分裂して行く個人の利害に依じて、各個のちがった願い事を聴き容れたまふものの如く、我々の祖先が信じ始めたのも其影響であらうが、なほそれ以上に働いていた社会的条件の、幾つか有ることは否むことが出来ぬ。列挙することは不可能であらうが、その一つは縁組其他の協同によつて、各村各氏族の間の親しみが加わり、信仰上の自他の対立が、段々と薄れて来たことが考

へられる。それでも隣接する部落どうし、氏神の仲が御悪いといふような言ひ伝へはなほ残つて居るが、少なくとも村の内部のみは先づ親類になつて、氏神信仰の共通といふことが次第に行はれやすくなつた。<sup>(48)</sup>

ここでの「氏神信仰の共通」の背景として、『日本の祭』におけるような人口増とは異なり、各氏族の縁組を指定しているのが注目される。これに続いて、「大きな特に有力なる神々の出現」として石清水・北野などへと立論が移つてゆく。この立論は、先に概要とした「氏神様と教育者」とやや類似している。

なお、同論では上記引用箇所との関連性は薄いかもしれないが、戦時体制との関わりが複数見られる。一つは一三「神道は衰へたか」で、富士山麓須走の浅間神社の氏子が「戦に出て死んだ者が<sup>(49)</sup>ない」として信仰されていること。今一つは、検閲によつて削除された一五「悲しむべき経験」の後半箇所<sup>(50)</sup>に次のようにある（次の引用は、削除された文章の全てではない）。

是に国家の大事に際して、この自然の事実<sup>(51)</sup>に拠つて人心を帰一せしめ又奮奮せしむる必要が有るだらうといふことを、予想し得なかつたのも非難せられてよい。神社はたゞ崇敬の対象といふことを口にしなが、日露の大戦役の時などにも、

郡長をして郡民を引率して、郡内の各社に祈願祭を営ましめたのはどうだと、かの南方氏などは非常に憤つて居たが、自分とは之に対して憤るのはまだ早計だらう、それよりも先づ大いに説かなければならぬと謂つて居た。<sup>(50)</sup>

ここでは、対外戦争での戦勝を神社に祈願することが、無条件に肯定されていると考えられる。しかし、これらの文言は初出の小山書店版はもとより、『定本柳田國男集』第一一卷でも新しい『柳田國男全集』第一六巻でも、『氏神と氏子』というテキストの中では読むことができないのである。

#### 四 氏神合同論の占領期への継承と終焉

##### ——講演「氏神と氏子」と東筑摩郡氏神調査報告書

本稿の主眼は、柳田のここという氏神合同論を戦時言説として考察することであるが、敗戦後しばらくも、氏神の合同・併合・統合などの文言や簡単な説明だけであれば、『村と学童』<sup>(51)</sup>（一九四五年）、『先祖の話』<sup>(52)</sup>、『祭日考』<sup>(53)</sup>（以上、一九四六年）などに見受けられる。

とはいえ、本稿冒頭で参照した住谷一彦の議論のように、この問題について比較的多くの議論がなされるのは、一九四七年に上

梓された『氏神と氏子』巻頭に掲載された同題の講演録（一九四六年七月靖国神社での講演による）だと考えられるので、以下簡略に見たい。

同講演は基本的には氏神論の形をとっており、タイトルに含まれている氏子についても言及されるが（全三〇パートのうち、一一、三〇など）、その組織に関わる頭屋制については表立って議論されない。四「神社の二つの種類」で全国の神社を「氏神の社」と「氏人をもたぬ神社」とに分け、靖国神社での講演を意識してか後者にそこそこ分量を割いて議論している（六、七、八、二七、二八など）。

そうした立論の中で、前者に相当する「氏神の社」について柳田は、一三で「村氏神」、一四と一五で「屋敷氏神」、一七で「一門氏神」とに分けて詳説する。これらの内、前の二者では異姓の家が共同して一つの氏神を祀っているが、なぜそうした共同が起るのかを、一六「氏神の合同」で考察しようとする。先に見た、住谷一彦がロードス島の比喩で注目していた箇所に対応する。

住谷も概要している通り、柳田は次の七通りの経緯によつて「氏神の合同」を説明している。①祭日の類似、②祭場に常設の建物不在、③祭の感動、④専門神職の進出、⑤祭神に対する考え方の変化、⑥祭の費用の増大、⑦村の統一の必要性。<sup>(54)</sup>個々に対する柳田の説明は省略するが、この七通りの経緯の全てが帰納によつ

て導かれてはおらず、先験的にもたらされた説明だと考えられる。ともあれ、柳田は住谷も引用している通り一九「氏神社の祭神」冒頭で、こうして合同された氏神を氏人の祖先と次のように結びつける。

私などに言はせると、日本の神社の成立ほど、単純で自然でわかりやすいものは無い。国内の最も大きな御社から、端々の無名の小社にまでも共通して、又一方には上世の記録にも表はれ、更に目の前の生活にも幾多の例のあることは、同じ血筋に繋がる者が集まつて、其々に同じ祖先の好意に信頼し、又是に感謝しようとするのが、社に於て神を祭り始めた唯一の動機だつたといふことである。<sup>(55)</sup>

これも帰納から導かれた作業仮説ではないかもしれない（「上世の記録」が明記されないの）が、おそらく問題はそこではないと思われる。この後一九において、村氏神や屋鋪氏神を含む氏神がなぜ祖先と無関係の大社の神を祭るのか、という問いへと進むからである。この議論は、およそ二五まで続く勧請神の考察となる。つまり、上の引用のように氏神合同論は、およそ一九三二年の「食物と心臓」から続く氏神イコール祖霊説を下敷きに展開していたと理解できる一方で、実際には多くの神社の祭神がそうし

た氏子の祖先とは無関係であることを柳田自身が認めてしまったのである。

この背景には、柳田が著したテキストのうえでは確認できないものの、一九四三年七月に彼が講演を行って調査を要請した長野県東筑摩郡の氏子調査の報告書が、一九四五年には完成したことがあるのではないかと筆者は推察している。

というのも、当初は一七一社を対象として、柳田の講演のように頭屋制への関心に力点をおいて調査計画が立てられたらしいが、二〇〇六年に国立歴史民俗博物館により六九社分に関して翻刻された報告書によれば、実際には神社の祭祀組織より神社合祀を含む神社の合同・合併に関心が持たれた模様で、報告書に合祀について記載のある神社が少なくない。<sup>(56)</sup>

しかし、それらを含み六九社の全てで調査当時において氏子の祖先を祭っていた祭神は無く、ほぼ全てが著名な大社の勧請神であった。場所柄もあり建御名方命が多く、他に保食神、大己貴命、応神天皇、天照大神、素戔鳴尊、天児屋根命などの他、山の神、地神、岩屋大神といった場所に関わる祭神も若干見られる。<sup>(58)</sup> これら以外では、柳田が同族神の例として講演で調査をうながしていた祝殿が元の祭神だったが、後に勧請神に代わったとする例、ある家の氏神であったが今は天神七代と称する、白山様と称する、などの例がわずかに見られる。<sup>(59)</sup> しかし、複数の氏神が合併し

た例は皆無であつた。

講演録「氏神と氏子」において、一六から一八までの氏神合同論を一九で氏子の祖先と結びつけた後、すぐに大社がどのように勧請されたかの議論に繋がるのは、一つの地域社会における具体的な氏神調査の結果を踏まえていた、と考えた方が理解しやすいのではないか。

要するに、何らかのデータから帰納された仮説ではなかった氏神合同論は、このように具体的な調査データによって立証しえないことが判明したのである。

## 五 結論

以上、本稿ではこれまでの柳田研究ではば問題とされなかった柳田の氏神合同論について検討してきた。考察の結果をいくつかに分けて書き上げることにした。

第一に、一九三六年頃から始まった原田敏明の氏神祭祀研究、とくに宮座研究の代案を柳田が求めた、という方向性の一環としてこの枠組があること。原田は、先に第二節(3)で引用した一九四〇年の「氏神祭祀の組織について」のように、原初的な氏神祭祀のあり方を地縁的なものであるとし、氏神は血縁とは無関係であると主張していた。対して柳田は氏神を氏の神、祖先神と

考えていた。

一方で柳田は、原田が輪番の氏神祭祀という観点から現行の宮座を捉えることを受け容れ、それが柳田の云う常頭屋(二軒が自らの氏神を祭る状態)から変化した形態だと捉えようとした。そのため、『神道と民俗学』や後に『氏神と氏子』に収録された講演録「祭と司祭者」で数多くの事例をあげ、そのことを論証しようとしていた。<sup>(4)</sup> ここにおいて祭神の捉え方である氏神合同論は、祭祀形態論であつた輪番での頭屋制(古態から変容した形態と柳田は考えた)と対応するものとして、一九四〇年代初頭に登場してきたのではないか。

第二に、そのように頭屋制の進展段階と祭神観とが結びつけられた結果、柳田の氏神合同論において最終の成果だと思われる敗戦後の講演録「氏神と氏子」に至つて、「食物と心臓」以来の氏神イコール祖霊説は中心的な論点ではなくなつてしまつた。これは、長野県東筑摩郡での氏神調査で、氏神を祭神とする神社がほぼ存在せず、もと氏神だつたという伝承の神社も、それが他の同様の氏神と合併したという例が一つも見られなかったことの影響による可能性もある。

第三に、それでは柳田の氏神合同論は、原田敏明の氏神祭祀研究の代案という側面だけなのか。柳田は、先に検討した『神道と民俗学』のような例外があるとはいえ、『民間伝承』誌や一般向け

の著作では戦局に積極的に奉仕せんとする姿勢を表立っては見えなかったが、そうした姿勢を全く表明しなかった訳ではない。本稿ではこれまで触れなかったが、例えば敗戦間近の一九四五年三月刊『新女苑』誌に、「特攻精神をはぐくむ者」という特攻隊員の母を称讃するエッセーを発表していた<sup>(1)</sup>。

先に触れた中でも、長野県での講演や神社精神文化研究所での講演「敬神と祈願」には戦時体制に積極的に貢献しようとする柳田の姿勢が垣間見られ、その中で氏神合同論は、頭屋制における祭主の輪番と対応するという形ではあるものの、人心を帰一する力を生むもの、と位置づけられていた。

合同した氏神を、柳田が人心を帰一する、具体的には軍神に続いて死ぬ人々の信仰を支えると考えたのは、それが家族成員以外誰も知らない小さな家の神ではなく、産土と呼ばれるようなローカルな神だからであり、かつそうした合同氏神である産土が（『神道と民俗学』四〇での議論のように）伊勢神宮に従属するからではないだろうか。

この点において、帰納的な手順に一切基づかない氏神合同論を、柳田國男の戦時言説として位置づけることができるであろう。

注

(1) 例えば、後藤総一郎「柳田國男と戦争」（初出一九七六年、後藤『柳田國男論』恒文社、一九八七年）。後藤は、柳田に戦争批判の思想が無かったとする益田勝実や橋川文三に反駁し、『日本の祭』や『先祖の話』において柳田が、「当時のファナティックな神道的臭さからの圧力」に對抗しうる「クールな客観的な眼」を持ち続けた、などと擁護する（掲載書、一四八頁）。

(2) 由谷裕哉「柳田國男の戦時下における祭祀論と戦争協力」（『宗教研究』九三巻別冊、二〇二〇年）。

(3) 柳田研究とは異なる観点からであるが、次のように柳田の神道論に関する考察は存在した。内野吾郎『新国学論の提唱』（創林社、一九八三年）。また、個々の著作論文相互の差異や経年変化をほぼ無視して、柳田の氏神を含む神観念周辺の議論を「固有信仰」として位置づけようとする柳田研究として、川田稔『柳田國男——「固有信仰」の世界』（未来社、一九九二年）、があった。本稿は、とくに後者の姿勢に対する違和感から出発している。

(4) 住谷一彦、クライナー・ヨーゼフ『南西諸島の神観念』（未来社、一九七七年）。

(5) 『柳田國男全集』一六巻（筑摩書房、一九九九年）、二六二—二六四頁。

(6) とはいえ、敗戦後の「新国学談」三部作を主な対象として氏神と祖霊との関わりを考察した研究は早くからあった。例えば、伊藤幹治「柳田國男 学問と視点」（潮出版社、一九七五年）、など。

(7) 小川直之「柳田國男と祖霊」（一）、『民俗』第八六号、一九七四年。

(8) 一九三二年（昭和七）一月に『信濃教育』に発表され、一九四〇年（昭和一五）に同題で創元社より刊行された柳田の著書の、冒頭に収録された論である。『柳田國男全集』一〇巻（筑摩書房、一九九八年）、三六七—三八二頁。

- (9) 同上、三六九頁。
- (10) 同上、三七六頁。
- (11) 由谷裕哉「山村調査をとのうに位置づけるか——大間知篤三と杉浦健一の言説に注目して」(『小松短期大学論集』一二二、二〇一五年)。
- (12) 索引項目および質問文例については、福田アジオ『山村海村民俗の研究』(名著出版、一九八四年)で「採集手帖」として再録されている頁を参照(総頁が打たれておらず、本の後半箇所に相当)。
- (13) 前掲『山村海村民俗の研究』では、本の前半に初年度と第二年度の報告書がそのまま再録されている。氏神に関係する報告は、初年度に大藤時彦「頭を中心とした祭祀の問題」、杉浦健一「山の神」神考、関敬吾「共同祈願の問題」、第二年度に関敬吾「宮座に就て」、という四者。これらの評価については、前掲注11由谷論文を参照されたい。
- (14) 柳田國男(編)『山村生活の研究』(民間伝承の会、一九三七年)。本文で引用もしくは頁数の表示を行う場合、翌年に再刊された版を底本として国書刊行会から一九七五年に刊行された同題名のリプリントによる。
- (15) 前掲注11由谷論文。
- (16) 由谷裕哉「戦時下における原田敏明の氏神祭祀論と柳田國男の頭屋制論」(『民俗学論叢』三五号、二〇二〇年、三四—三五頁)。
- (17) 原田敏明『宗教 神 祭』(岩田書院、二〇〇四年)、四〇四頁。
- (18) 前掲注16由谷論文、三七—四三頁。
- (19) 『日本諸学振興委員会研究報告』八哲学(教学局、一九四〇年)、八八頁。
- (20) 同上、九〇頁。
- (21) 昔話研究の著作としての第一作は『桃太郎の誕生』(三省堂、一九三三年)であったが、この時期には『昔話と文学』(創元社、一九三八年)が出された。他に語り物・伝説を含むナラティブ研究として、『民謡覚書』(創元社、一九四〇年)、『妹の力』(創元社、一九四〇年)、『伝説』(岩波書店、一九四〇年)や、後に『物語と語り物』(角川書店、一九四六年)に収録された論考の多く(「語り物と物語」一九三八年、「有王と俊寛僧都」「甲賀三郎の話」一九四〇年、など)が著された。
- (22) 柳田の方言研究は、一九二七年(昭和二)に『人類学雑誌』第四二巻に連載された「蝸牛考」に始まるが、一九三〇年代後半は民俗語彙集の刊行が目立っていた。『葬送習俗語彙』(民間伝承の会、一九三七年)、『歳時習俗語彙』(同会、一九三九年)、など。他に、『方言覚書』(創元社、一九四二年)など。
- (23) 『民間伝承』第一号(一九三五年九月)の七頁に、「日本民俗学講習会記事」が掲載されている。その終わり近くに、「折口氏座長の下に『民間伝承の会』(会名はあとで柳田先生が選ばれた)がつくられる提案が出され、全会一致でこの講習会をして更に意義あらしめたものとなつた」とある。
- (24) 戸塚ひろみ「民間伝承の会」(柳田國男研究会(編)『柳田國男伝』三一書房、一九八八年)、八二七頁。
- (25) 福田アジオ『日本の民俗学「野」の学問の二〇〇年』(吉川弘文館、二〇〇九年、一七一—一二二頁)。
- (26) 川村邦光『日本民俗文化講義』(河出書房新社、二〇一八年)、二〇二頁。
- (27) 上記の先行研究三者とも「巻頭言」と形容していたが、この倉田の文章が載る第四巻にはまたこの表現は無く、各号の単なる冒頭頁であった。各号の冒頭頁が「巻頭言」と銘打たれるのは、一九四二年五月刊の第八巻第一号からである。
- (28) 本文のように『民間伝承』第八巻の巻頭言として三回掲載されたが、次にも再録、『柳田國男全集』三〇巻(筑摩書房、二〇〇三年)、五七二頁。
- (29) 前掲注25福田書、一七〇—一七二頁。
- (30) 『柳田國男全集』第三〇巻(前掲注28)、六六一頁。
- (31) 柘植信一「戦時下の学問研究」(前掲注24『柳田國男伝』、九二七—九二八頁)。

- (32) 前掲注28『柳田國男全集』第三〇巻、六六二頁。
- (33) 同上、六六三頁。
- (34) 『柳田國男全集』第三巻（筑摩書房、一九九八年）、四九二頁。
- (35) 同上、五〇〇頁。
- (36) 以上引用の二箇所、同上、五〇四―五〇五頁。
- (37) 由谷裕哉「柳田國男『神道と民俗学』における神社祭祀論の再検討」『民俗学論叢』三三三号、二〇一八年、六二―六三頁、および六七―六八頁。
- (38) 『定本柳田國男全集』第一〇巻（筑摩書房、一九六二年）では「対岸大陸と島々の諸民族」（三八七頁）と改竄されていた。
- (39) 同じく『定本』三九一頁では、「国の共同の問題を解決するに先立つて」と改竄されていた。
- (40) 伊藤純郎『柳田國男と信州地方史』（刀水書房、二〇〇四年）、一四〇頁。
- (41) 『柳田國男全集』三一巻（筑摩書房、二〇〇四年）、八九―九五頁。
- (42) 同上、七一―七二頁。
- (43) 田澤直子『吉野作造と柳田國男』（ミネルヴァ書房、二〇一八年）、一六〇頁。田澤は柳田が含意していた筈の「氏神信仰の本来的なありよう」を五つあげている。しかし、それら全てはこの講演とは無関係な、一九四〇年代というのだけ同じ、柳田の別の言説から引かれている。
- (44) 赤坂憲雄『漂泊の精神史』（小学館、一九九四年）。
- (45) 『民間伝承』誌で後続の第九巻六・七合併号（一九四三年一〇月刊）の九四頁、「学会消息」欄の「木曜会」第二二五回（九月二五日）の記録として、「ウブスナと氏神との関係について、柳田先生の新たな見解が述べられた」とあることを参考にした。東北地方のようにウチガミがあつてウブスナの無い地方など、「氏神が家の神であつて、ウブスナが土地の神であるとしたなら、此の解釈は容易となる」などとされている。
- (46) 由谷裕哉「敗戦をまたぐ二つの神道論——柳田國男「敬神と祈願」と鈴木大拙「日本的靈性的自覚」第二講」（『比較思想研究』四五号、二〇一九年）。
- (47) 江藤淳「『氏神と氏子』の原型——占領軍の検閲と柳田國男」（『新潮』第七八巻一号、一九八一年）。検閲された文言は江藤の上記論文にも掲載されているが、『柳田國男全集』第一六巻（前掲注5）では、改竄された『氏神と氏子』の頁に続いて、三七〇―三七三頁に掲載されている。
- (48) 前掲注5『柳田國男全集』第一六巻、二九六頁。
- (49) 同上、三〇七頁。「富士山東麓の須走の浅間神社などは、縁があつて私は毎年行つて見たが、土地ではこの社の氏子に限り、戦に出ても死んだ者が無いと謂つて居た。さうして周囲の村々の信仰はこの社に集注し、大きな招集のあるたびに、群をなして御百度に参つて来て居た」、などである。
- (50) 同上、三七三頁。
- (51) 『柳田國男全集』第一四巻（筑摩書房、一九九八年）、五八八―五八九頁。
- (52) 『柳田國男全集』第一五巻（筑摩書房、一九九八年）、一〇二―一〇四頁。
- (53) 『柳田國男全集』第一六巻（前掲注5）、四四頁。
- (54) 同上、二六二―二六四頁。
- (55) 同上、二六七―二六八頁。
- (56) 一九四三年一〇月刊の『民間伝承』第九巻八号では、一〇月に完成した調査項目の概要を、一氏神、二氏子、三頭屋、四祭、としていた。二から四が祭祀組織と関わっていると考えられる。
- (57) 『基幹研究「戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究」』翻刻資料集2 長野県東筑摩郡『神社誌』（国立歴史民俗博物館、二〇〇六年）。一頁の総説に、「昭和一九年（一九四四）から翌二〇年にかけて作成した」神社誌の、翻刻である旨の記載がある（総説の執筆は、伊藤純郎）。
- (58) 山の神は笹賀村の山神社（五二頁）、地神は生坂村の五社（二三二頁）、岩屋天神は中川村の岩屋神社（三三八頁）。
- (59) 元ある家の祝殿だったのは上上手村の伊勢宮（二六八頁）、氏神が天神

---

七代に代わったとされるのは生坂村の七社大権現（二四四頁）、同じく氏神から代わったとされるのは同村の白山大権現（二五〇頁）。

（60） 由谷裕哉「戦時下における原田敏明の氏神祭祀論と柳田國男の頭屋制論」（前掲注16）。

（61） 『柳田國男全集』第三二卷（前掲注41）、二二二頁。